

内井昭蔵と銅の世界



建築家 内井昭蔵 (うちいしょうぞう・SHOZO UCHII)

| | | |
|--|-------------|-------------------|
| 主な作品 (受賞名) | 1933年 | 東京生まれ |
| 身延山久遠寺宝蔵殿 (レイノルズ賞AIA/BCS賞) | 1956年 | 早稲田大学第一理工学部建築学科卒業 |
| 世田谷美術館 (毎日芸術賞・日本芸術院賞) | 1958年 | 早稲田大学大学院修士課程修了 |
| 御所 | 1967年 | 内井昭蔵建築設計事務所設立 |
| 大分市美術館 (BCS賞) | 1993年-1996年 | 京都大学教授 |
| 主な著書 | 1996年 | 滋賀県立大学教授 |
| 健康な建築 (彰国社)、ロシアピザンチン (丸善)、 建築家のドローイング1 世田谷美術館 (駸々堂) | | |

八月三日、日本を代表する建築家、内井昭蔵氏が突然逝去され、関係者のもとより多くの人々が「巨星墜つ」との悲しみにつつまれた。

内井昭蔵氏は日頃から「健康な建築」について語り、建築は丈夫で長命なだけでなく、周囲の環境とのバランスが大切だと主張していた。なかでも、アーキテクチュアの素材と環境・生活・人との関りに関心を持ち、そして二貫して金属の「銅」に深い愛着を抱いておられた。そのため、建築と銅について語る機会も多く、ここにそのコメントの一部をご紹介します。



「私が銅を意識し、銅と出会ったのはフィンランドであった。泊まったホテルの前にエリエル・サリネンの傑作、ヘルシンキ駅舎がそびえていた。この美しさにしばし立ち止まって見上げた時の感激は忘れられない。私はその塔の上に美しい緑色をした銅の装飾を見て、私もいつかあの美しい銅を使ってみたいと思ったものだ。銅の緑色は雪国によく似合う」

「銅については「金属の中でも人間に一番近いものです。人間の肌にとっても合うし、鉄よりも銅のほうが

が早かったわけですから、そういう意味で親しみやすい材料です。金属というと、どうして

も親しみづらい、肌に合わないという感じがして、特に日本人は金属を嫌いますけれども、その中でも銅という材料は暖色の肌が生活の中に溶け込んでいる金属材料だと思います」と、お話ししました」(御所の設計にあたり、天皇、皇后両陛下にどのようなお話し銅屋根について)をされましたか?という質問に対して

「銅は、赤銅・ブラス(真鍮)・ブロンズ(青銅)など、合金でさまざまなたまな表情と性能が生まれる。ブラスも金色だが、金とは違い素材で人なつく、懐かしい輝きをしている。私はこの金色に光る金物が好きだ。ピカピカに輝き上げたブラスバンドの楽器は、見ているだけで心が浮き立つ」

「ブラスは建築物としては最高だと思う。中略―絶えず真鍮磨きで磨いていないと黒くなってしまいうブラスが良い。働きの奥さんがないと無理かもしれない。磨けば光り、新鮮さを生み出す素材、これほど人間的なものはないと思う。」



▲ 御所



▲ からくり記念館



▲ 桂坂の家



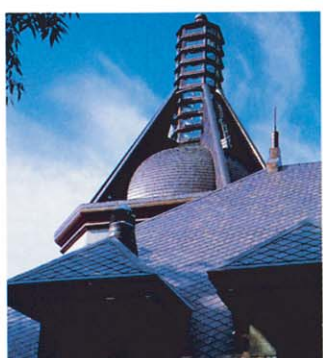
▲ 浦添市工芸美術館



▲ 長谷木記念館



▲ 世田谷区立美術館



▲ 落谷虹児記念館

「中略―私の家の金物は、すべてブラスである。昔からブラスであったが、戦中戦後、安易なステンレスやアルミに変えてしまっていた。修復した際、すべての金物を光るブラスに戻した。この素材で健康な肌合いを私は楽しんでいる」

「建築に銅を使いたかった理由は、人間の心を伝える材料は軟らかく、時とともに変化し、しかも美しくなる、という性質でなければならぬ」と考えたからである。人間を象徴する塔は、人間のように時とともに美しく変化しなければならぬ」

◆ ◆ ◆

内井先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。